

現代フランス語における [N1 + spécial + N2] 型の複合名詞について

古賀 健太郎

0. はじめに

現代フランス語における「名詞(N1) + 名詞(N2)」構造の実例を子細に観察していると、以下のように N1 の直後に spécial のような品質形容詞が現れる連鎖（以降[N1 + spécial + N2]と表記することにする）を見出すことができる（下線は筆者による）。

- (1) a. samedi midi nous faisons une raclette en famille et j'aimerais rajouter d'autres ingrédients avec le traditionnel

fromage spécial raclette et la charcuterie habituelle (jambon cru, blanc, rosette...etc).¹

土曜日の昼に家族でラクレットをやるんですが、定番のラクレット用チーズや、いつものハム・ソーセージ類（生ハム、ボンレスハム、ロゼット等）の他にも食べ物を入れたいと思っています。

- b. C'est ainsi que la Maison d'Artémis propose, le vendredi 15 novembre, une journée spéciale chocolat, dont le programme réjouira les plus gourmands.²

そんなわけで Maison d'Artémis は 11 月 15 日金曜日に、チョコレート特別デーを企画、おいしい物好きが最高に喜ぶプログラムになっています。

これらにおいて興味深いのは、当該環境で現れる形容詞がほとんどの場合この spécial である点と、その形容詞の修飾対象が[N1 + N2]全体ではなく N1 のみであるという点である。特に 2 点目については複合名詞の定義にも関わる問題を示唆しており重要である。果たして[N1 + spécial + N2]を複合名詞の 1 タイプとして扱うことは妥当なのだろうか。以下ではまず当該構造の統辞的特徴を、N1 の直後に品質形容詞を伴わない[N1 + N2]との比較を通して明らかにする。そして、筆者が収集した実例を基に、[N1 + spécial + N2]を連辞と見るべきか複合名詞と見るべきかという問題について検討していく。

1. [N1 + spécial + N2] の統辞的特徴

Fromage spécial raclette（ラクレット用チーズ）のような構造については、先行研究ではほとんど言及がなく、管見の限り、Noailly (1990 : 101)においてその一部の例が示されている程度である。

[N1 + spécial + N2]は、主要部である N1 を品質形容詞 spécial が修飾、同時に N2 がそれを限定するという構造になっている。N2 自体は冠詞等の限定辞を伴わない。ここで修飾と限定を区別したのは、属詞とし

ての性質を判定する以下の統辞テストを行った結果、*spécial* には属詞性を見出せた(cf. 2a-2c)のに対し、N2 にはそれが認められなかった(cf. 3a-3c)ためである。

- (2) a. Ce fromage est spécial. (属詞位置での出現)
b. un fromage très spécial (程度を表す副詞による修飾)
c. un fromage spécial et original (他の品質形容詞との等位接続)
- (3) a. *Ce fromage est raclette. (属詞位置での出現)
b. ??un fromage très raclette (程度を表す副詞による修飾)
c. *un fromage raclette et original (他の品質形容詞との等位接続)

[N1 + N2]に関する詳細な研究を行った Noailly (1990 : 101)では、ここで問題としている[N1 + *spécial* + N2]に対応する構造を、*pause-café* (コーヒープレイク) のような、N2 が N1 を限定する[N1 + N2] (以下「*pause-café* 型」と呼ぶことにする)³の一種として扱っている。実際 *pause-café* 型の N2 にも[N1 + *spécial* + N2]の N2 と同じような非属詞性が以下のテストから確認できることから、この想定は妥当だと考えられる。

- (4) a. *Cette pause est café. (属詞位置での出現)
b. *une pause très café (程度を表す副詞による修飾)
c. *une pause conviviale et café (他の品質形容詞との等位)

さらに、*Pause-café* 型においては「コーヒー(café)のための休憩(*pause*)」のように、N2 が N1 の目的を表す関係を多くのケースで見出せることが先行研究で報告されている(Cf. Arnaud 2003)が、同様の意味関係が[N1 + *spécial* + N2]においても想定できる。そればかりか、後者の構造では上記の意味関係を *spécial* によってより明確に示していると捉えることも可能だろう。例えば以下のように *pause-café* 型と[N1 + *spécial* + N2]型の両方で成立可能な N1 と N2 の組み合わせの場合、*spécial* を介した後者を用いることによって、「スキーのための(専用の)保険」という意味合いをよりはっきりと示すことが可能になると考えられる。

- (5) a. assurance ski スキー保険
b. assurance spéciale ski スキー専用保険

ところで Noailly(1990)は、*pause-café* 型で N1 のみに対する修飾を伴うのはそもそも稀であると、以下のような例を挙げ説明しているが⁴、この点については考察の余地が残されていると言える。なぜならこのような構造—少なくとも[N1 + *spécial* + N2]—は、ごく最近のフランス語においては一定数観察されるものであ

り、そこに生産的な形成の可能性が示唆されるからである。また、具体的にどのような形容詞がここで観察されるのかという点や、凝結の度合いに関わる点で *pause-café* 型との相違が見出せる可能性もある。いずれにしても、最新の実例の収集およびそれに基づく考察が必要である。

(6) a. Le plan national cancer がん対策国家計画

(*Le Monde* 1981 年 9 月 18 日, p.32, cité dans Noailly 1990 : 101, 下線は筆者)

b. Nous vous retrouvons, Jacques Bourgeois, pour cette journée exceptionnelle Verdi.

あなたの話題に戻りましょう、Jacques Bourgeois、ヴェルディ特集デーですから。

(*France-Musique*, 1988 年 7 月 23 日, 13:25, cité *ibid.* 下線は筆者)

2. 実例の収集と分析

今回分析対象とする[N1 + spécial + N2]の実例は、筆者が 2010 年 8 月から 2014 年 5 月にかけて収集した 52 種類である。実例の出典はフランス国内で発行されている新聞や雑誌、テレビ、ウェブサイトの他、街中の広告や製品のパッケージから収集したものも含まれている。

まずは N1 を修飾する形容詞の種類についてである。圧倒的に多かったのは spécial (女性単数形 spéciale およびその複数形 spéciales を含む⁵) で、観察された 52 件のうち 49 件で観察された。残りの 3 件はそれぞれ exclusif, spécifique, exceptionnel を含む例が 1 件ずつであった。以下にそれぞれの例を挙げておく。

(7) a. fromage spécial raclette ラクレット用チーズ

b. offres spéciales été 夏季特別割引

c. tarif exclusif internet インターネット限定価格

d. fiche horaire spécifique travaux 工事期間特別時刻表

e. tarif exceptionnel abonnés scolaire 学校単位の契約による特別料金⁶

この結果から、*pause-café* 型での N1 のみに対する修飾の許容度が、spécial の場合に例外的に高いということが示唆される。残る exclusif や spécifique, exceptionnel については、いずれも意味的に spécial (特別な) に近い形容詞であることから、spécial を伴った形式からの類推によって形成された可能性がある。

ところで、ここで興味深いのは spécial の形態統辞的性質である。確かに(2)で見たように、spécial 自体は N1 を修飾していると見ることができるのだが、[N1 + spécial + N2]の spécial に別の品質形容詞を等位させることは実際には困難なようである(cf. 8b)。これは、un fromage onctueux et crémeux (まろやかでクリーミーなチーズ) のように、名詞連辞において複数の品質形容詞を等位接続できるのとは対照的である。

- (8) a. fromage spécial raclette (=7a)
 b. ?? fromage spécial et onctueux raclette

さらに、N1 への性の一致が見られない(9a)のような例が3件観察されたことも、当該構造における spécial の形態統辞的性質の特異さを示唆している。実際には N1 に性一致する例(9b)も同様に観察されることから、表記上の揺れと見ることが出来るが、いずれにせよこの一連の傾向は、[N1 + spécial + N2]における spécial が単なる品質形容詞ではなくなりつつある可能性を示唆している。この点は次節で改めて取り上げる。

- (9) a. assurance spécial ski スキー用保険 (女性名詞 assurance への性一致なし)
 b. assurance spéciale ski スキー用保険 (女性名詞 assurance への性一致あり)

N1 および N2 として観察された名詞の種類に関しては、pause-café 型との相違が見られた。

Pause-café 型のうち、特に高い生産性を実現するのはごく一部で、そこで用いられる名詞に関して制限があるようである。古賀(2012)は、Pause-café 型の生産的形成を可能にする条件として、構成素が「N1 (特定の名詞⁷) + N2 (未指定)」あるいは「N1 (未指定) + N2 (特定の名詞⁸)」という組み合わせである必要性を指摘している。つまり構成素のどちらか片側は凝結しており、もう片方においてのみ、組み合わせ潜在的自由度が保証されていると考えられる。

一方で[N1 + spécial + N2]では、N1 および N2 の構成素となる名詞の出現頻度に目立った偏りが見られず、組み合わせ自由度が pause-café 型に比べ高いようである。この点についてはさらに多くの実例を見て検討する必要があるが、今回収集した中にそれを裏付けるような興味深い例が観察された。

[N1 + spécial + N2]における構成素の組み合わせ自由度の高さは、N1 あるいは N2 が単体の名詞だけでなく、以下のように統辞的に複雑な構造⁹であっても形成できるということからうかがえる¹⁰。

- (10) a. jeunes pousses d'endives spéciales apéritif アペリティフ用チコリ若芽
 b. code de la route spécial vélo 自転車用交通法規
 c. assurance spéciale sports d'hiver ウィンタースポーツ用保険

ちなみに pause-café 型の場合にも、以下の(11)のように統辞的に複雑な構造が N1 または N2 に置かれる例が観察されるが、いずれも古賀(2012)で指摘された特定の名詞 (pause や assurance, étudiant(s) など) とペアを組む側の名詞における例である。つまり、あくまでも特定の名詞が片側に入り生産性が実現できる環境下でない限りは、pause-café 型において統辞的に複雑な構造を構成素とすることは困難なようである。

(11) a. assurance sports d'hiver ウィンタースポーツ保険 ← [assurance + N2] cf. (10c)

b. carte de séjour étudiants 学生滞在許可証 ← [N1 + étudiant(s)]

こうしたことから、pause-café 型では実現が困難な N1 と N2 の組み合わせを成立させる手立てとして、あるいは「N2 のための N1」という意味合いをより明確に示す手段として [N1 + spécial + N2] が機能していると考えられる。ただし、構成素に関する制限が少ない上に「N2 のための N1」という意味関係を実現できる手段は他にもある。実際、現代フランス語では couteau à beurre (バターナイフ) のような、無冠詞の N2 に前置詞 (特に à や de) を伴った構造の形成 (cf. Benveniste 1974) が非常に生産的で、今回観察された例の中にも、[N1 + spécial + N2] と [N1 + PREP + N2] が互に対応している例がいくつか確認された。¹¹

(12) a. couteau spécial champignons キノコ用 (特別) ナイフ

b. couteau à champignons キノコ用ナイフ

以上、観察された 52 種類の実例から、[N1 + spécial + N2] の構成素に見られた傾向を分析した。その結果、N1 と N2 に入る名詞の自由度が pause-café 型に比べて高いことに加え、N1 を修飾する形容詞が spécial か、それに類する 3 種類の形容詞のいずれかに限られたこと、さらにその形容詞が、他の品質形容詞との等位を受け付けず、場合によっては N1 への性一致を伴わないことが明らかになった。

3. [N1 + spécial + N2] は複合名詞なのか？

3.1. 3つの可能性

冒頭でも述べたように、[N1 + spécial + N2] を複合名詞と見なせるかは微妙な問題である。なぜなら Martinet (1967) をはじめとする多くの先行研究で指摘されているように、複合名詞の内部構造を統辞的に操作できないことは、複合名詞¹²を名詞連辞から区別する最も根本的な性質と考えられるからであり、品質形容詞が N1 のみを修飾する当該構造はその反例のように見えるからである。

その一方で、われわれの調査から、[N1 + spécial + N2] における spécial が単なる品質形容詞ではなくなっているという可能性が示唆されたことも見逃してはならない。例えばこの spécial が前置詞のように機能している可能性も考えられるだろう。もしそうであれば、当該構造における spécial が単に N1 を修飾しているという捉え方自体が不適切であるかもしれない。

こうした点を踏まえ、ここでは以下の 3 つの仮説について検討していきたい。

仮説 1 : 前置詞省略を伴った構造である可能性

fromage spécial {pour / Ø} raclette

仮説 2 : spécial 自体が前置詞として機能している可能性

fromage {spécial / à / pour} raclette

仮説 3 : spécial が凝結したモデルに基づいて形成された複合名詞の可能性

[N1 + spécial + N2] → fromage spécial raclette

3.2. 仮説 1 : 前置詞省略を伴った構造である可能性

今回観察された[N1 + spécial + N2]の中には、以下のように N2 に前置詞を伴った構造が同様に観察されるケースがあった。このことから、[N1 + spécial + N2]に前置詞省略を想定し、名詞連辞の一変種と位置付けることも、一見すると出来そうである。

(13) a. assurance spéciale pour {le / Ø} ski スキーのための保険

b. assurance spéciale ski (=9b)

しかしここにはいくつかの問題がある。まず、(13a)と(13b)を統辞的に同じ構造だと想定することは果たして妥当なのだろうか。特に、前置詞付きの場合、(13a)の le ski のように N2 が限定詞を伴うことができる点は考慮すべき問題である。なぜなら[N1 + spécial + N2] では、第 1 節で指摘したように、N2 自体が限定辞を伴うことはなく、その点で前置詞付きの構造とは異なるからである。

(14) a. assurance spéciale pour le ski (=13a)

b. *assurance spéciale le ski

さらに、今回の調査で示唆された spécial の統辞的特徴についても、この仮説では説明が難しい。もし前置詞省略が起こったとしたならば、なぜ spécial や類義の exclusif、spécifique、exceptionnel 以外で同様の現象がほとんど見られないのだろうか(cf. 15)。また、名詞連辞では可能な複数の品質形容詞の等位接続が、なぜ[N1 + spécial + N2]になった途端に困難になるのだろうか(cf. 16)。こうした点を踏まえると、[N1 + spécial + N2]をただ単に前置詞省略を伴った名詞連辞と扱うのは適切ではないと思われる。

(15) a. cadeau original {pour / ??Ø} Noël クリスマスのための独創的なプレゼント

b. équipement particulier {pour (le) / ??Ø} stage インターンのための特別な装備

(16) a. un événement spécial et inoubliable pour les enfants 子どもにとって特別で忘れられぬイベント

b. *événement spécial et inoubliable enfants

3.3. 仮説 2 : spécial 自身が前置詞として機能している可能性

[N1 + spécial + N2]の spécial 自身が例外的に前置詞として機能するようになったと想定することは、いくつかの点において妥当だと考えられる。まず、他の品質形容詞による[N1 + Adj + N2]の形成がほとんど見られない点、並びに spécial と他の品質形容詞との等位接続が困難な点(cf. 16)は、この spécial の前置詞化の想定によって説明することができる。また、(12)でも見たように、[N1 + spécial + N2]と競合し得る以下のような[N1 + PREP + N2]が存在することも、spécial と既存の前置詞との対応関係を示唆している。対応する前置詞としては、目的を示す pour や à が主に考えられるが、必ずしもそれだけとは限らないだろう。

- (17) a. couteau pour champignons キノコ用ナイフ
b. couteau à champignons キノコ用ナイフ (=12b)
c. couteau spécial champignons キノコ用 (特別) ナイフ (=12a)

さらに、語彙的要素が前置詞のように機能する現象は、すでに先行研究においていくつかのケースが報告されており、そのこともこの仮説を支持する要素となろう。例えば Danon-Boileau & Morel (1997) は point de vue X (X に関して) や façon X (X 風に) などを、Barbérís (1997)は rue X (X 通り) ¹³を前置詞のように機能する語彙的要素として指摘している (X はいずれも無冠詞か固有名詞)。

- (18) a. sinon pour e/ point de vue orientation et études qu'est-ce qui :: qu'est-ce qu'il faut faire quoi en fait pour/ pour s'orienter là-dedans quoi ?
ところで進路と学業に関しては何を、何をしなきゃいけないの、進路を決めるために?
(Danon-Boileau & Morel 1997 : 197 太字化・下線は筆者)
- b. Un Arnold au visage émacié façon Clint Eastwood (comme Clint Eastwood / clint eastwoodienne)
Clint Eastwood のようなやつれた顔つきをした Arnold (ibid. 太字化・下線は筆者)
- (19) Louis habite rue de l'Ancien Courrier (/dans la rue de l'Ancien Courrier / la rue de l'Ancien Courrier)
Louis は l'Ancien Courrier 通りに住んでいる (Barbérís 1997 : 165)

たしかに、point de vue X や rue X で見られる前置詞的な性質は、われわれが扱っている spécial にも想定出来そうである。しかしその一方で、前置詞との相違も同様に確認することができる。

以下の例を見てみたい。N2 が所有代名詞 vos などの限定詞を伴う場合(cf. 20)、あるいは partir のような動詞不定形を伴う場合(cf. 21)には、spécial の有無にかかわらず前置詞 (以下の例ではいずれも pour) が不可欠となる。これらはいずれも名詞連辞であり、この構造において spécial は単なる品質形容詞でしかない。

(20) a. des cadeaux spéciaux pour vos enfants あなたの子どもたちのための特別なプレゼント

b. *des cadeaux spéciaux vos enfants

(21) a. Club Med vous propose ses plus belles offres spéciales pour partir selon vos envies : (...).¹⁴

クラブ・メッドはご希望の出発時期に合う最もお得な特別割引を提供します。

b. *offres spéciales partir selon vos envies

[N1 + spécial + N2]の spécial に前置詞的性質の一端が見出せる一方で、それが N2 に限定詞を伴わない場合にのみ認められるということは、この spécial が語形成の枠組みの中でもっぱらその機能を発揮することを意味する。それに対して一般的な前置詞は、語形成レベル(cf. 17a, b)、統辞レベル(cf. 20a, 21a)いずれにおいても機能するという点で spécial とは異なっている。したがって[N1 + spécial + N2]の spécial が前置詞と完全にパラレルな性質を有しているとはまでは言えないだろうが、語形成レベルにおいてのみ、既存の前置詞に対応するような形で spécial が機能しているように見えるのは興味深い。¹⁵

3.4. 仮説 3 : spécial が凝結したモデルに基づいて形成された複合名詞の可能性

[N1 + spécial + N2]という語形成上の枠組みの中でのみ spécial に特異的な性質が見られるということは、[N1 + spécial + N2]そのものが複合名詞の形成モデルの 1 つとして機能している可能性がある。つまり、spécial が凝結し、N1 と N2 は未指定のモデルである。凝結を想定することで、spécial が他の品質形容詞とは性質が異なる点(cf. 8, 15)だけでなく、場合によっては spécial が N1 に性一致しないという点(cf. 9)、さらにはさまざまな N1 と N2 の組み合わせによって生産的に形成できる点(cf. 10)についても説明できるだろう。

ところで、Benveniste (1974)は、生産的な語形成を可能にする装置¹⁶として [N1 + à + N2]や [N1 + de + N2]を指摘しているが、われわれの想定する[N1 + spécial + N2]という形成モデルは、これに近いものと言える。3.3節において、spécial が語形成の枠組みに限って既存の前置詞に対応し得ることを指摘したが、見方を変えれば、spécial が à や de といった前置詞に対応しているというよりも、むしろ[N1 + spécial + N2]がそれ自体として[N1 + à + N2]や [N1 + de + N2]といった形成モデルに対応していると想定することが出来よう。そのように考えることで、[N1 + spécial + N2]が(20a)や(21a)のような名詞連辞とは異なる構造であること、つまりあくまでも複合名詞の 1 タイプであるということが説明できる。

しかしながらこのことが、統辞と語形成を完全に二分することにはつながらない。Gross(1988, 1990)が指摘するように、語彙と統辞は連続体を成しており、複合名詞の形成はまさにその両者の間において起こる現象だからである。その中で、構成素組み合わせの潜在的自由度が高い[N1 + spécial + N2]は統辞により近い性質を持っていると言える。一方で、N1 か N2 のいずれかが特定の名詞によって凝結している pause-café 型の場合、想定される形成モデルは[*pause* + N2]や[*assurance* + N2]のような、それぞれ語彙的に特化したものになるはずであり、したがって[N1 + spécial + N2]よりは語彙寄りの形成ということになる。さらに

centre-ville (街の中心) のように、N1 も N2 も凝結し、構成素の入れ替えが全くできない[N1 + N2]も存在するが、この場合には[N1 + N2]で完全に1つの語彙となっている。このように、同じ[N1 + N2]をベースとする構造であっても、語彙—統辞間における位置づけはそれぞれであり、複合名詞の定義も必然的に、この連続体的関係の中で成されるべきである。

4. 終わりに

[N1 + spécial + N2]の統辞的特徴と、語形成におけるその位置づけについて本稿では分析、検討した。その結果、当該構造における spécial に通常の品質形容詞とは異なる性質を見出せたほか、N1、N2 の構成素組み合わせ自由度の高さや、N2 に限定辞を加えることの困難さといった傾向から、[N1 + spécial + N2]が名詞連辞ではなく、それ自体で複合名詞の形成モデルとして機能している点、さらにその形成モデルが、前置詞を伴っている[N1 + à + N2]や [N1 + de + N2]といった複合名詞のそれに近いものであることを指摘した。今後は実例をさらに収集した上で、さらに詳細な考察ができるようになることが望まれる。

参考文献

- Arnaud, P.J.L. (2003) *Les Composés* Timbre-poste, Lyon : Presses Universitaires de Lyon.
- Barbérís, J.-M. (1997) « « Rue X » : La grammaticalisation à l'oeuvre dans la parole », *Faits de langues*, 9, pp.165-174.
- Bauer, L. (2001) *Morphological Productivity*, Cambridge, Cambridge University Press.
- Benveniste, E. (1974) « Fondements syntaxiques de la composition nominale », *Problèmes de linguistique générale II*, Paris, Gallimard. pp.145-162.
- Booij, G. (2009) « Compounding and construction morphology », *The Oxford Handbook of Compounding*, Rochelle Lieber & Pavol Štekauer (éds.), New York : Oxford University Press, pp.201-216.
- Danon-Boileau, L. & Morel, M.-A. (1997) « *Question, point de vue, genre, style...* : les noms prépositionnels en français contemporain », *Faits de langues*, 9, pp.193-200.
- Fradin, B. (2009) « IE, Romance : French », Rochelle Lieber & Pavol Štekauer (éds.), *The Oxford Handbook of Compounding*, New York : Oxford University Press, pp.417-435.
- Gross, G. (1988) « Degré de Figement des Noms Composés », *Langages*, 90, pp.57-72.
- (1990) « Définition des noms composés dans un lexique-grammaire », *Langue française*, 87, pp.84-90.
- Goldberg, A. (2006) *Constructions at Work*, New York : Oxford University Press.
- Koga, K (2014) « Formation productive des composés du type *pause-café* », *Études de langue et littérature françaises (Furansugo Furansu-bungaku Kenkyu)*, Société Japonaise de Langue et Littérature Françaises, 104, pp.53-68.

Martinet, A. (1996) [1960] *Éléments de linguistique générale*, 4ème éd., Paris : A. Colin.

Noailly, M. (1990) *Le substantif épithète*, Paris : PUF.

古賀健太郎(2012)「生産的な名詞複合に関する辞書記載の現状について」, 『ふらんぼー』38, 東京外国語大学フランス語研究室, pp.73-90.

———(2013)「関係形容詞の欠如を補完する名詞について」, 『ふらんぼー』39, 東京外国語大学フランス語研究室, pp.110-130.

高田晴夫(1998)「合成法の占める位置と役割」, 『フランス語を考える—フランス語学の諸問題 II』, 三修社, pp.241-251.

¹ <http://www.marmiton.org/communaute/forum-fil.aspx?ThemeId=9&ThreadId=101775> 2012年1月12日参照。ここでは別の形容詞 *traditionnel* も伴っているが、この形容詞は *fromage spécial raclette* 全体を修飾しているものと考えられる。

² <http://www.sudouest.fr/2013/11/07/la-valse-des-commerces-continue-1222140-2964.php> 2014年5月19日参照。

³ Noailly (1990)はこのタイプの[N1 + N2]を *complémentarion* (補足)と呼んでいる。

⁴ このうち(6a)の形容詞 *national* には、属詞としての性質を認めるのが実際には難しいことから、N1を修飾ではなく限定していると見る方が妥当だろう。一方(6b)に関しては、N1の *journée* を形容詞 *exceptionnelle* が修飾する関係を認めることができる。

⁵ 男性複数形 *spéciaux* は観察されなかった。

⁶ *abonnés scolaire* は原文ママ。Cf. *abonnés scolaires*

⁷ 古賀(2012)では具体的に、*espace* (スペース)や、*pause* (休憩)、*assurance* (保険)など33種類を挙げている。

⁸ 上と同じく、*enfant(s)* (子ども)や *étudiant(s)* (学生)、*auto* (自動車)など22種類を挙げている。

⁹ (10)で挙げた *jeunes pousses d'endives* や *code de la route* をそれぞれ名詞連辞と見るべきか、複合名詞と見るべきかという問題については、ここでは紙面の都合上深く取り上げることができないが、[N1 + Adj]および[N1 + de + N2]の凝結度について考察した Gross (1988)および Gross (1990)の議論が参考になるだろう。ちなみに(10c)の *sports d'hiver* に関しては、それ全体が無冠詞の N2 であるという点から、自由な連辞とはそもそも性質を異にしていると捉えられる。

¹⁰ N1とN2のどちらも統辞的に複雑な構造を持つ例は、今回考察対象とする30例の中には見られなかった。しかしながら後の調査で以下のような例が観察されたので、参考までに提示しておくことにする。 *Stage de tissage spécial vacances d'été* 夏休み特別機織り教室

¹¹ しかし両者が厳密な意味で競合すると言えるかどうかについては、それぞれの実例を個別に検討する必要がある。ちなみに *pause-café* 型と *sommeil hivernal* (冬眠)のような「名詞+関係形容詞」の間の競合または補完の関係については、古賀(2013)を参照されたい。

¹² Martinet はこれを連辞素(*synthème*)と呼んでいる。

¹³ *Barbérís* によると、道路の名前として同様に用いられる *boulevard* (大通り)や *place* (広場), *quai* (河岸)などについても *rue* と同じような文法化を想定できるが、その中でも特に文法化の度合いが際立っているのが *rue* だという。

¹⁴ http://www.clubmed.com/cm/offre-sejour-profiter-des-offres-speciales_p-133-l-FR-pa-OFFRES-ac-so.html, 2014年5月19日参照。下線・太字化は筆者。

¹⁵ 同じことは Danon-Boileau & Morel (1997)が取り上げている *façon X* などに関しても言えるだろう。

¹⁶ Benveniste (1974)はこれをシナプシ(*synapsie*)と呼んでいる。